



Data	2023-130
監督・脚本:	ジャン＝ポール・サロメ
原作:	カロリーヌ・ミシェル＝アギーレ『La Syndicaliste』
出演:	イザベル・ユベール／グレゴリー・ガドゥボア／フランソワ＝グザヴィエ・ドゥメゾン／ピエール・ドゥラドンシャン／アレクサンドリア・マリア・ララ／ジル・コーエン／マリナ・フォイス／イヴァン・アタル

👁️👁️ みどころ

政治スリラー、社会派サスペンスの本場は『大統領の陰謀』（76年）、『インサイダー』（99年）等の名作を生んだ米国だが、フランスにもその系譜が！しかし、「私はモーリーン・カーニー」と言われても、それは一体誰？また、「正義を殺すのは誰？」と聞かれても、さて？

原子力発電のあり方を巡っては、その分野で急成長してきた中国との“距離感”が難しい。フランスの原子力大手アレバは、中国といかなる密約を？それを知ったアレバ労働組合幹部のモーリーン・カーニーは、5万人の組合員の雇用を守るため、いかなる行動を？そんな状況下、2012年12月17日に起きたのが、手足を縛られ、腹にAの字を刻まれたモーリーン・カーニー事件。犯人は誰？何の目的でこんな酷い犯罪を？そう思われていたが、アレレ、アレレ、彼女はいつの間にか“虚偽の告発事件”の被疑者に！そんなバカな！？

さあ、コトの顛末は如何に？事実経過の確認も大切だが、それ以上になぜこんなバカげた事件になってしまったのかをじっくり検証したい。

■□■モーリーン・カーニーって誰？本作は何の映画？■□■

本作は実話に基づいたもの。そして、ジャーナリストであるカロリーヌ・ミシェル＝アギーレのルポルタージュ本『La Syndicaliste』（17年）に基づくものらしい。そのため、本作の原題は『La Syndicaliste』だが、それでは日本人には何のことかさっぱりわからないために、邦題は『私はモーリーン・カーニー 正義を殺すのは誰？』とされている。しかし、歌舞伎俳優が大上段で大見栄を切るような（？）、この邦題は一体ナニ？そもそも、モーリーン・カーニーって一体誰？

モーリーン・カーニーは、フランスの原子力大手アレバの労働組合の委員長だった女性

の名前。そして、カロリーヌ・ミシュル＝アギーレのルボルタージュ本『La Syndicaliste』は、そのモーリーン・カーニーが中国との秘密契約の存在を内部告発し、ハラスメントに巻き込まれていくサスペンスドラマらしい。もっとも、本作の題材になった、モーリーン・カーニーに関する国家的スキャンダルは、実は「よく知られている」とも言えるし、逆に「あまり知られていない」とも言えるものらしい。だって、本作でモーリーン・カーニー役を演じた女優イザベル・ユベール自身もモーリーン・カーニーのことを知らなかったそう。さらに、ジャン＝ポール・サロメ監督自身も、『La Syndicaliste』の存在を偶然ツイッター上で知り、映画化を切望することになったそう。

そんな“モーリーン・カーニー事件（＝国家的スキャンダル）”をテーマとし、邦題を『私はモーリーン・カーニー 正義を殺すのは誰？』とした本作の「売り文句」は「世界最大の原子力発電会社で秘された大スキャンダルが明るみに。5万人の従業員を守ろうとした彼女に何があったのか？」とされている。こりゃ興味津々！こりゃ必見！

■□■ “政治スリラー・社会派サスペンス” の系譜に注目！ ■□■

本作のパンフレットには、林瑞絵氏（パリ在住の映画ジャーナリスト）の「挑むは国家的スキャンダル、シャブロルの遺伝子を継ぐサスペンス」が掲載されている。そして、ここでは、本作はジャンルで言えば“政治スリラー”とされ、アメリカ映画に有名作品が多いジャンルとされている。なるほど、なるほど。

そのうえで、林氏は「その伝統はフランス映画の主流ではないものの、現在まで脈々と続く。本作は同ジャンルの新しい秀作の誕生を高らかに告げるものとなった。」と高く評価し、「ここではより直接的な影響を感じさせる2本のフランス映画を、作品理解の補助線として紹介したい。」としている。その2本の映画とは、①フランソワ・オゾン監督の『グレース・オブ・ゴッド 告発の時』（19年）（『シネマ47』142頁）、②クロード・シャブロル監督の『L'ivresse du pouvoir 権力への陶醉』（06年／日本未公開）だ。なるほど、なるほど。

私はアメリカ発の“政治スリラー・社会派サスペンス”である『大統領の陰謀』（76年）、『コールガール』（71年）、『インサイダー』（99年）（『シネマ1』46頁）等が大好き。ジャン＝ポール・サロメ監督は私の全然知らなかったフランス人監督だが、さあ、本作の出来は？

■□■ 2人の女性に注目！アレバの組合書記の地位権限は？ ■□■

女性の社会的進出が西欧諸国に比べて大きく遅れている日本では、大企業に“女社長”は先ずいない。しかし、本作を見て、2012年当時のフランス最大の総合原子力企業アレバの社長がアンヌ・ロヴェルジョン（マリナ・フォイス）という女性だったと知ってビックリ！マルクスとエンゲルスが『共産党宣言』（1848年）を発表した当時のヨーロッパでは、資本家と労働者は対立関係にあり、労働者（労働組合）側の最大の武器はストライキだった。しかし、21世紀に入った今では、一国の総理大臣が大企業に対して労働者の賃上げを

要請する姿からも明らかなように、労使の対立構造は一変し、経営者と労働組合が労使協調でやっていくのが常識になっている。そんな変化の中、学生運動が盛り上がっていた私の大学時代には、労使協調（型）の労働組合とは別に、労使対決（型）の労働組合があり、その幹部は概ね社会党や共産党の闘士だった。しかし、本作冒頭に登場する 2012 年当時のアレバの労働組合の書記だったというモーリーン・カーニーの地位と権限は？

本作冒頭では、アレバの女社長アンヌ・ロヴェルジョンが突然解任され、その後任として、モーリーンとアンヌの 2 人が“全く能力なし”とボロクソにけなしている男リュック・ウルセル（イヴァン・アタル）が就任するストーリーが描かれる。そんな中、モーリーン・カーニーはフランスの電力公社（EDF）の情報提供者から、EDF とアレバが組んで、中国の原子力事業者と技術移転契約を交わそうとしているという情報を得ることに。アンヌ社長時代なら、モーリーンは直接アンヌに質問すれば論点整理ができ、解決策の模索が共にできそうだが、会社とその未来、従業員 5 万人の雇用を守るため、モーリーンが新社長のウルセルに秘密協定の真偽を問いただすと、ウルセルからは「会社の戦略に口を出すな」と厳しく言われてしまったから、アレレ・・・。

■□■中国の世界戦略は？中仏の協力は？彼女の戦い方は？■□■

2023 年 11 月の今、中国の経済成長の鈍化と一帯一路政策の停滞が明らかになっている。また、中国は東京電力の福島第一原発の“処理水”の海洋放出について、「核汚染水の排出」と厳しく非難しているが、他方で原発建設を急速に進めてきたのは、中国だ。

フランス革命の国フランスは世界で最も人権意識の強い国だが、コト原発政策や EV 車の政策については、コトあるごとに中国と対立するアメリカと違って、ややもすれば中国寄りになる傾向（？）がある。モーリーン・カーニー事件が起きたのは 2012 年 12 月 17 日だが、その時点で既にフランスは原発大国の国だから、原子力総合企業アレバは 2011 年 3・11 の東日本大震災で福島第一原発事故を起こした東京電力と同じように、いや、それ以上に、国家にとって重要な存在（企業）だった。そんなアレバで、2012 年にトップがアンヌからウルセルに交代したのは、同社が大きな損失を計上し、経営危機に陥ったためだが、ウルセル社長以下の新経営陣は、その危機をどうやって乗り切るの？

本作によれば、フランスは政府主導による原子力業界の再編を進め、国有電力会社 EDF と中国企業にアレバの安定的な原子力事業を売却するという道を選んだらしい。アレバの新社長ウルセルは当然、それに沿った経営方針をとったが、フランス政府のそんな大戦略の可否は難しい問題だ。

それによって、フランスの技術が中国に渡ることや、従業員の雇用が失われることに危機感を抱いたモーリーンは、ウルセルらと激しく対立することに。そこで、モーリーンは、第 1 に、モンテブール産業再生大臣に告発レポートを見せたが、取り合ってもらえず、第 2 に、国民議会の議員たちにレポートを配布すると、大臣からは「議員に近づくな」と警告を受けてしまったからアレレ。そこで、モーリーンは最後の手段として、オランダ大統

領に直訴するため、大統領との面会を取り付けることに。しかし、いかに大手企業の労働組合とはいえ、その一幹部に過ぎないモーリーンが単独でこんな行動を取っているの？私
の感覚ではそこら辺りが少し疑問だが・・・。

■□脅迫対策・自衛手段は？夫の協力は？強気一辺倒の是非は■□■

本作で私が疑問に思う点の第1は、組合幹部であるモーリーンが常に1人で動いていること。それは、学生運動にのめり込んでいた私の体験によれば、労働組合の運営は会議の連続であり、その行動は常に集団でやっていたという印象が強いからだ。私が学生運動に嫌気が差し、離れていった理由の1つがそれだったから、本作でモーリーンがEDFと中国企業との重要な極秘情報を巡って自分1人の判断で行動している（ように見える）姿は、私には大きな違和感がある。アレバの前（女）社長とは極めて友好的人間関係が築けていたとはいえ、大統領に直接面会を求めるというモーリーンの行動は如何なもの？

他方、本作はそんなモーリーンに対して電話による脅迫が相次ぐ姿や、車での帰宅中にバイクの男から車の窓ガラスを割られ、バッグを奪われる等の現実には発生した被害の姿が描かれるが、それに対するモーリーンの自衛手段は？著名な音楽家として活動しているモーリーンの夫ジル・ユーゴ（グレゴリー・ガドゥボア）が最大限協力していることはよくわかるものの、私にはモーリーンの強気一辺倒の姿勢が目につき、自衛手段があまりにもおろそかだと思えたが、さて・・・？

■□■事件勃発！傷は大！これが自作自演？そんなバカな！■□■

モーリーンがオランダ大統領との面会の約束を取り付けたのは2012年12月17日。その面会日の当日、パリ郊外の自宅の洗面所で身支度をしていたモーリーンは何者かに襲われ、手足を縛られ、ナイフで腹にAの文字を刻まれ、膣にそのナイフの柄を挿入されるという暴行を受けることに。椅子に縛られ、身動きできない状態のモーリーンを発見したのは、翌日家にやってきた家政婦だった。

私が本作で疑問に思う点の第2は、モーリーン・カーニー事件の捜査に当たるのが国家憲兵隊だということ。ウィキペディアによると、フランスの国家憲兵隊は「フランスの警察組織の1つ。フランス軍事省および内務省の管轄下にある国家憲兵として、主として地方圏での警察活動を担当する。また警察組織であると同時に、陸軍・海軍・空軍とともにフランス軍の一部を構成している」というものだが、なぜモーリーン・カーニー事件の捜査を国家憲兵隊が担当することになったの？「憲兵」と聞けば、日本人の私には、戦前の憲兵や特高（特別高等警察）という負のイメージが強いが、フランスのそれはどうなの？それはともかく、本作中盤からは、モーリーン・カーニー事件の被害者として国家憲兵隊から事情聴取を受けていたはずのモーリーンが、いつの間にか「虚偽の告発」の容疑者にされていくから、アレレ、アレレ。本作中盤では、そのサマをじっくり観察したい。

そんな国家憲兵隊の扱いにモーリーンが精神的に大きく動揺したのは当然だが、それにしても、アレレ、アレレ。いつの間にかモーリーンがそれを自認してしまうとは？そこで

私が疑問に思う第3の点は、その時点で、モーリーンが自分の依頼した信頼できる弁護士に何の相談もしていないことだ。これも強気一辺倒を貫くモーリーンの性格の欠点によるものだろうが、その時点での状況の変化に応じた自衛手段（＝弁護士への相談依頼）は不可欠だったのでは？

■□■監禁事件の犯人は？これが自作自演？被害者が被疑者に■□■

2012年12月17日に発生したモーリーン・カーニー事件におけるモーリーンは、椅子に縛られた状態で発見された被害者だった。したがって、警察（国家憲兵隊）の任務は、彼女を監禁し傷つけた犯人たちを探し出し、逮捕することだった。ところが、この事件はモーリーンによる自作自演であり、虚偽の告発ではないのか？そう疑い始めた国家憲兵隊のブレモン曹長（ピエール・ドゥラドンシャン）は、どんどん“思い込み捜査”の方向にのめり込んでいったらしい。

本作は、一方では、「モーリーンを被害者とするモーリーン・カーニー事件が起きたのはなぜか？」「その犯人は誰か？」を考えることの重要性を訴える作品になっているが、他方で、モーリーンが被害者から一転して「自作自演事件」の被疑者にされていく姿を描いていく作品になっているので、そのあまりの変化にビックリ！なぜそんな事態になってしまったの？フランスの警察（国家憲兵隊）は一体どうなっているの？

私には、そんな疑問が膨れ上がるとともに、ブレモン曹長からそんないわれのない疑いをかけられたとしても、なぜ、あの強気一辺倒の女性モーリーンが「虚偽の告発だった」などという、バカげた筋書きを認めてしまったの？それが私にはどうしても理解できなかった。もっとも、モーリーンは自身の“自白”をすぐに撤回したそうだが、1度自白したことのマイナスはあまりにも大きすぎたようだ。そのため、「自作自演事件」については、4年後の第1審で禁錮5ヶ月（執行猶予付き）、罰金500ユーロの有罪判決を受けてしまうことに。

■□■控訴審は有能な弁護士と女性捜査官の協力で無罪に！■□■

私は阿倍野再開発訴訟の第1審（大阪地裁）では、何の証拠調べをすることもなく、数ヶ月であっけなく（予想通り）敗訴してしまった（昭和61年3月26日）。しかし、控訴審（大阪高裁）では、私たちの主張の正当性を立証するさまざまな書証が採用された結果、見事に勝訴した（昭和63年6月24日）。そして、阿倍野第二種市街地再開発事業における事業計画決定は“争訟成熟性”があるから、その取消しを求める訴えは適法であるという、歴史的にも学問的にも大きな価値のある判決を獲得することができた。そこでのポイントは、大阪高裁の3人の裁判官が、私たちが日本ではじめて主張した第二種市街地再開発事業の事業計画決定についての主張に興味を示し、耳を傾けてくれたことだった。

それと同じように（？）、無力感に打ちひしがれながら英語教師として過ごしていたモーリーンが、控訴することを決意した「自作自演訴訟」の控訴審のポイントは、第1に、新しく有能な弁護士テミム（ジル・コーエン）に依頼したこと。1審の弁護士とテミム弁護

士との相違点がどこにあるのかは私にはよくわからないが、その能力に大きな差があったことは明らかだ。ポイントの第 2 は、かつてブレモン曹長の下で自作自演訴訟の捜査に携わっていた女性捜査官の協力を得られたこと。モーリーンの元を訪れてきたこの女性捜査官は、モーリーンの事件の 6 年前に、会社の不正を告発した技術者の妻がモーリーンのケースと酷似した被害に遭っていたことを告げたから、モーリーンが早速その妻と会うことに。その証言を聞いたモーリーンは、犯行の手口から警察に自作自演と疑われたことまでそっくりであることにビックリ！フランスの国家憲兵隊は一体どんな仕事をしているの？

このように、第 1 に弁護士を変え、第 2 に女性捜査官の協力を得たことによって警察が隠蔽していた新たな証拠も入手して裁判に臨んだモーリーンは、事件から 6 年の歳月を経て、ついに無罪の判決を獲得することに！

■この大女優は伝記モノ（？）よりもコメディの方が！■

てなわけで、フランスが生んだ珍しい政治スリラー、社会派サスペンスと言うべき本作が取り上げた、原子力大手アレバ労働組合の幹部、モーリーン・カーニーの物語は無事ハッピーエンドを迎えることに。しかし、私は本作のような伝記モノ（？）はあまり好きではない。その最大の理由は、私がそもそも「労働組合」という組織・団体が嫌いな（肌が合わない）ためだが、フランスを代表する大女優たるイザベル・ユペールがその役になりきっている主人公モーリーン・カーニーという女性像にも、私は全然魅力、共感を覚えることができない。それもきっと、労働組合の幹部という仕事を私が嫌い、肌が合わないためだろう。

私は本作の鑑賞直後に、イザベル・ユペールが「第 3 のヒロイン」として、若手 2 人の美人女優と共演した、フランソワ・オゾン監督の『私がやりました』（23 年）を観た。そこでのイザベル・ユペールは実に嫌味な役だったけれども、同時に非常に魅力的だった。映画（作り）とはそんなもの。したがって、同じイザベル・ユペールというフランスを代表する大女優を起用するのなら、本作のような伝記モノに起用するよりも、『私がやりました』のようなコメディに起用の方が良かったのでは？これはもちろん、私の好みによる、私の独断と偏見によるものだが・・・。

2023（令和 5）年 11 月 14 日記